

第5章 提言と教訓

5-1 提言

評価チームは TESDA 本部及び TWC に対して以下の提言を行った。

TESDA 本部への提言

- (1) TESDA 本部が TWC のジェンダー主流化推進センターとしての役割を強化、継続するためのサポートを行うことを強く提言する。
- (2) 上記に加えて、TWC の業務に見合った規模（職員数、予算など）の維持が求められる。

TWC への提言

- (3) TWC は職業訓練分野のジェンダー主流化における類のない役割を継続することを心掛ける必要がある。また TWC の責務として職業訓練分野の Gender Sensitivity Training や TESDA ジェンダー担当者のネットワークの拡大、男女別データ（gender disaggregated data）の収集及び分析などの活動を継続すべきである。
- (4) 今までの TWC の成果が DTI、PESO、LGU 及び NGO など女性の就業、起業向上に密接な関係がある組織との提携、共同事業などを実施することが期待される。その際、TWC は自己の持つ比較優位や強み及び求められるサービス領域を慎重に検討すべきである。

5-2 教訓

評価チームは今後の JICA 事業へ効率・効果的な実施に向けて以下のような教訓をまとめた。

プロジェクトの計画に関して

- (1) 計画プロセスを文章化して保存しておくことの重要性

本評価調査では、PDM は確認できたがその作成過程を示す文章がなかったため、どのような経緯でプロジェクトの内容が検討されたのかを確認することが困難であった。PDM はプロジェクトの概要と捉えるには十分であるが、評価を行う際にはその背景を理解する必要がある。詳細に記載する必要はないものの、PDM 作成過程および用語の定義が把握できる程度の記録は必要と思われる。

- (2) コンセプトの明確化

前述の通り、本プロジェクトのターゲットが、プロジェクト目標（TWC の卒業生）と上位目標（職業訓練分野）で異なり、両者の関係は、「目的—手段」の関係とはなっていない。また多数の指標が策定されているが、成果の指標の大半は、活動の指標であり、プロジェクト目標における資格取得率は成果 2 の訓練コースの改善の指標と考えられる。成果の一部はプロジェクト目標ではなく、上位目標を達成するための手段と考えられる。活動は多数記載されているが、成果との因果関係が不明確な活動もある。

これらはプロジェクト計画時に、プロジェクトのコンセプトを具体化していなかったことに起因すると考えられる。プロジェクトの計画時は活動の詳細をつめるのではなく、コンセプトを明瞭にする（抽象的なコンセプト、アウトラインを具象化する）ことに精力を注ぐべきである。

プロジェクトの実施に関して

(3) プロジェクト計画の変更

本プロジェクトではPDMの変更はほとんど行われていないが、活動の追加や削減は行われている。しかし、PDMの変更はプロジェクト実施担当者自身ではできないという認識をカウンターパートがもっていたため、プロジェクトの途中で成果の指標の幾つかが達成困難であることが分かっても変更等は検討されなかった。

ワークショップを実施する際の留意点として、適切な参加者を選ぶことが重要である。現状分析やニーズ分析を行うためのワークショップでは、様々なステークホルダーによる多様な意見の抽出は大変有益であるが、PDM作成時などのプロジェクトの実施内容を策定する場合は、その分野の専門家、経験者、プロジェクトの実行責任者などが中心となる必要がある。無分別な利害関係者による計画策定は無責任なPDMを策定する要因となる。

また、PDMは目標にむけた活動の進捗状況や成果の達成状況を随時モニタリングするためのツールであるが、本プロジェクトでは個々の活動については比較的良くドキュメンテーションが行われていても、プロジェクト全体としてのモニタリングと計画修正にPDMが活用されなかった。プロジェクト実施のプロセスでPDMを使いこなしていくための研修や支援が必要であったと思われる。

JICA事業におけるジェンダー案件に関して

(4) ジェンダー指標の標準化

プロジェクトが単体で、ジェンダー主流化を具体的な指標であらわすことは大変な労力を要するので、今後同様の案件を実施していくのであれば、JICAとしてどの様に測るのか、事例を収集し、標準化することが望まれる。